

魔術師の見る夢

「おかえりなさいパストル。お疲れ様。晩御飯、用意できてるよ」
「…………え？」

仕事を終えて、部屋に戻ると、オーリが笑顔でパストルを出迎えた。
パストルは一瞬状況が理解できなくて、ぼかんとしてオーリを見る。
変だ。

ここにオーリがいるはずがない。
だってオーリはヴィスクの孤児院で、二十五年間、目を覚ます気配もないのだから。

「パストル？ どうしたの？」

「…………ああ、いや」
あいまいに答えてから、パストルは不器用にほほ笑んだ。

「なんでもない。何を作ってくれたんだ？」
「じゃーん！ パストルが好きなクッキーです！」

オーリはテーブルの上に、食べきれないほどのクッキーを並べて、自慢げに笑った。
温かな紅茶の香りがする。

二十五年前、孤児院の職員だったオーリが、子供たちのために焼いてくれたクッキーと、安物の茶葉でいれたお茶。

パストルの記憶にある「オーリが作ってくれた食べ物」はこれだけだ。
食事はいつも別の職員が作っていたし、何せ貧乏な孤児院だったから、食事のとき以外に食べ物が出てくることなんてめったになかった。

だから、時々オーリが焼いてくれるクッキーを、孤児院の子供たちは本当に楽しみに
していた――。

人の輪に入るのが苦手なパストルは、いつもそれを遠目から見ていた。
中庭のテーブルに集まって、あたたかな日の光の中クッキーを頬張る子供たちと、それを見守るオーリの姿が、まるで物語の中の出来事みたいで、美しくて。
パストルはそれを見ているのが嫌いではなかった。

だって、そうして孤立していれば、あとでオーリがパストルの分のクッキーを包んで、図書室までもってきてくれたから。

オーリの膝に座って、クツキーを頬張って、あたたかなお茶を飲んで、二人で絵本を読む時間が、パストルは大好きだった。

だからこうして、今も歪な夢を見る。

仕事を終えて、部屋に戻ると、オーリがクツキーとお茶を用意して待っていてくれるなんて——吐き気を催すようなグロテスクな悪夢を。

パストルは、にこにここと笑顔を絶やさないオーリの頬にそっと触れた。

唇をなぞると、柔らかくて、あたたかい。

オーリは目を閉じて、少し唇を開いた。

キスを待つ仕草。

オーリがするはずもない仕草。

ああ——吐き気がする。

早く目を覚まさなければ。

この先は見たくない。

この先は見たくない。

見たくない。見たくない。見たくない——。

「——パストル？」

心配そうな声でした。

すぐ、耳元で。

パストルは弾かれたように飛び起きた。

全身に嫌な汗がふき出して、心臓が不快な鼓動を刻んでいる。

「ひどい汗。怖い夢を見たの？ 私の名前を呼んでたけど……」

「えあ……？」

夢。

そう、夢だ。

オーリが起きているはずない。

ああ、いや、違う。

目覚めたんだ、本当に。

だからこうして寝室に、不安げに眉をひそめてパストルを見つめているオーリがいる。

パストルはベッドサイドの水差しを探った。

その手に、オーリが冷たい水を満たしたコップを手渡してくれる。

一気におおって、深く、深く息を吐く。

時計を見ると、深夜を少し過ぎたところだった。

「悪い……うるさかったな」

「ううん。うるさくはなかったよ。パストルは寝言も寝息も小さいから」

オーリは優しく微笑んだ。

ずきりと、臓腑の奥が鈍く痛む。

悪夢の続きを見ているようだ。

作り物の笑顔。

偽物の優しさ。

——パストルが望んだ偶像。

パストルは、本当はオーリがどうしたいか知っている。

この病院を出て、仕事を得て、十七歳の少女にふさわしい、穏やかで清らかな生活をしたいと望んでいる。

だが、その想いを、望みをすべて踏みにじり、違和感を違和感と気づかせないように捻じ曲げて、パストルのそばにいるのが幸せで、当たり前で、これからもそうであるように、無理矢理思い込ませている。

「パストル？ 大丈夫？」

「う、え……おえええ……！」

耐えきれなくて、パストルは飲んだばかりの水をその場に嘔吐する。

「パストル!? 大変……! 待ってね、今〃オーリ〃さんよんでくるから……!」

「いい、よせ!」

パストルは叫んで、立ち去ろうとするオーリの手首をつかんだ。

会いたくない。

今は本物のオーリ以外、ほしくない。

オーリはわがままな子供を見るような目でパストルを見る。

「でも、わたしは『オーリ』さんたちみたいに、薬の知識とかないし……」

「俺は医者だ。忘れたのか？」

「でも……」

「本当に、大丈夫だから。ここにいて……どこにも行かないでくれ……お願いだから……」

「わかった。パストルがそうして欲しいなら……」

「うん……そうしてほしい」

「……濡れた毛布、片付けるね？ 予備がクローゼットにあったっけ？」

パストルが、オーリの代用品として雇っている女たちは、その狂った仕事の代償としてパストルの病院で医学を学べることになっている。

「オーリ」の仕事は二年か三年で終了だ。それ以上は、パストルの狂気に引きずられ、彼女たちも精神を病む。

その後の仕事先も、パストルの病院から紹介することになってる。

医師を目指してもいいし、看護師を目指してもいい。

とにかく『オーリ』出身の人材は、よその病院でも優秀で評判がよかった。

理由は明白だ。

パストルが『オーリ』に求める能力の基準が高く、その基準を満たすならばどこでも優秀な人材として通用する。

パストルの『オーリ』であったという経歴は、有能さの証左に他ならなかった。

口さがない者はいる。

壊れた男の慰み者だったのだから、簡単に男に股を開くのだろうと。

だが、パストルは過去に『オーリ』であった者への侮辱を許さない。

そして『オーリ』達も、パストルへの侮辱を許容しない。

それほどに——ただの『役職』にすら真剣に向き合うほどに、パストルにとってオーリは神聖な存在だった。

その事実を、『オーリ』たち自身が知っている。

だが、彼女たちの有能さは、彼女たちのためのものだ。

パストルは自分の体は自分で診られる。

パストルが欲しいのはオーリの偶像であって、彼女たちの能力そのものではないのだ。

だから、もういらぬ。

本物のオーリがこうしてパストルを心配そうに見つめてくれるだけで、パストルの心は癒される。

彼女たちを部屋に呼ぶこともなくなった。

この病院に、あまりにも「オーリ」の役職が馴染み過ぎていて、今も病院の職員は「オーリ」たちにあれこれ仕事を任せようとするが、当の「オーリ」たちはすっかりパストルに寄り付かなくなった。

彼女たちは、それをパストルが望んでいると知っている。

パストルに食事を運ぶのも、着替えを手伝うのも、夜の相手も、今はすべて本物のオーリの仕事だ。

一年か二年して、彼女たちに十分に知識が付いたら、別の病院に送り出して、この狂った関係は終わりになる。

そうして、オーリと二人だけの生活が始まる。

もう、病院も閉めてしまおうか。

全部オーリを目覚めさせるためだった。

金に困っているわけでもない。

オーリを連れて、どこか、誰も知らない街に引っ越して、二人で新しい人生を始めてしまおうか。

パストルがそんな夢を語ると、オーリはふたつ返事でうなずいてくれる。

いいよ。パストルがそうしたいなら。

そう、言ってくれる。

けれどその言葉がパストルには「私はそうしたくないけれど」に聞こえて、踏み切れないまま日々が過ぎて行った。

「なんだか、最近ずっと調子悪そうじゃない？　ちゃんと検査とかしてる？」

オーリは濡れた毛布を部屋のすみに押しやって、クローゼットから新しい毛布を引っ張り出しながらパストルに首だけで振り向いた。

「……よく、眠れなくて」

「悪夢、よく見るの？」

パストルはうなづく。

オーリは新しい毛布を持ってきて、ベッドサイドに腰を下ろした。

そして、パストルの頭を抱き寄せる。

「よしよし。お仕事が大変で、疲れてるんだもんね。ちょっとお休みとか取れない？ 一日中部屋から出ないで、ダラダラしてる日とか作ろうよ。ね？」

「……休み」

「それか、一緒に外にお散歩にいくとか」

「——ダメだ！」

全身の血の毛が引くのを感じて、パストルは声を荒らげた。

ぎくりとしたオーリが、不安そうにパストルを見る。

「……どうしたの？ 外は嫌？」

「……オーリは？」

「え？」

「外に行きたい……？」

「それはまあ……だってお散歩は気持ちいでしょ？」

オーリがこの病院に来て、そろそろ二か月だ。

一度も、ただの一度も、パストルはオーリに外出を許可していない。

オーリが「外に出たい」と言うたびに、二人で外に出かけた嘘の記憶を植え付けた。

だって、外に出たら。

外に出したら、取られてしまう。

この病院は、パストルが作り上げた世界だ。

この世界でだけ、パストルは強くいられる。

ここから出たら、オーリのことを守れない。

得られない苦しみにもがくのならば耐えられた。

だが、得てしまったものを失うのは、どうしても耐えられない。

偽りの偶像はもう、その役割を果たしはしない。

あれは他人だ。

オーリじゃない。

似てもいない。

「……外は嫌だ」

「そうなの？」

「ここがいい……ここにいたい……オーリと二人で、ずっと……」

そっか、とオーリはうなずく。

そして――。

「いいよ。パストルがそうしたいなら」

と、ほほ笑んだ。

耐えきれず、パストルは優しく頬を撫でるオーリの手を振り払った。

「そうじゃないだろ!？」

「え……?」

「俺がそうしたいだけじゃダメなんだ。オーリもそうしたいって、思ってくれなきゃダメなんだよ!」

「え……あ、ごめんさ……」

「違う……!　そこは謝るんじゃない。オーリはそんな風に謝らない!」

「待ってパストル、私、何を言われているのか……」

「分からないか?　分からないよな……!　何も覚えてないんだから……!」

怯えた目をして、オーリが数歩下がった。

パストルはハツとして、慌ててベッドから出てオーリの手を握る。

不安と恐怖で、その指先は冷えている。

温めてやりたいのに、パストルの指も同じように冷たい。

「ごめん、オーリ……怒鳴ったりして……オーリが悪いんじゃないんだ。ただ俺が……最近、ちょっとおかしくて……」

「……うん。大丈夫、ビックリしただけ」

「ほんと?　怒ってない?」

「怒ってないよ。パストルが不安定なのは、今に始まったことじゃないし」

くすくすと、オーリはからかうように笑った。

緊張で強張ったパストルの全身の筋肉が、その笑い声でとけていく。

パストルが無言で唇を寄せると、オーリは静かに目を閉じ、唇を開いた。

舌を滑り込ませると、あたたかくぬめる舌が応じて、絡み、冷えた指先が熱を取り戻していく。

そうすると、少しずつオーリの中が潤って、繼るように回された細い腕からふっと緊張が抜ける。

こんな瞬間にまで、嘘をつく。
嘘をつかせている。
あまりにも、無意識に。

きつとオーリ自身も、嘘をついている自覚はないのだ。
ただ、パストルが喜ぶセリフを選んでいる。
それを自覚するたびに、オーリの心が離れていくのを感じる。

「オーリ……オーリ……背中、爪立てて……ズタズタにして、俺のこと……」
体だけを犯しながら、パストルはオーリに縋った。
このまま、オーリに引き裂かれてしまいたい。

そして病院から逃げて、自由になるオーリの後ろ姿を見ながら死んでしまいたい。
そんな倒錯的な思いが溢れて、パストルはがむしゃらにオーリの体を責め立てる。

快楽を感じる方法は、とつくに忘れてしまった。
ただ、こうしていなければ息もできない。

濡れた水音と、肉を打つ音。
耳に心地よい甘い声。
誰かがオーリを犯している。
それが自分であることを、パストルは受け入れられずにいる。

「愛してる、愛してる……愛してる……！」

泣きながら、パストルは体内で腐敗した欲望を、オーリの中に吐き出した。
腰からどつと力が抜けて、パストルはオーリを抱き込むように、ベッドに深く沈み込む。
む。

二人の呼吸だけが、人の寄り付かない塔の最上階で、妙に寂しくて、不安だった。
オーリの細い指が、いたずらにパストルの髪をもてあそぶ。

「……ねえ、パストル」

「……ん？」

「私、パストルに何かひどいことしてる？」

ぎくりとして、パストルは腕の中のオーリを見た。

ぼんやりとしたその双眸は、見るともなく天井を見上げている。

「どうして、そんな風に思うんだ？」

「わからないけど……夢を見るの」

「夢？」

「私がパストルを傷つける夢。パストルにひどいこと言う夢」

「それって……どんな？」

「わからない」

オーリはゆるゆると首を左右に振った。

「でも……ただの夢じゃない気がして……パストル、最近ずっと具合悪いでしょ？ も

しかして覚えてないだけで、私、パストルの事すごく傷つけたのかなって」

「バカだな。ただの夢だよ」

「ほんと？ パストルは優しいから、私に嘘ついたりしない？」

「オーリ、俺の目を見て」

命じられるまま、オーリはパストルの目を見つめ返した。

その瞳に映る自分の姿だけが、昔は好きになれた。

だが今は、この目に映る自分が最も邪悪な怪物に見える。

「指を弾いたら、おまえは……」

開いた口を、パストルはいったん閉じた。

限界だと、とつくに理解できている。

やり直さなければ。

今までの思い出を全部なかったことにして、また最初の朝からやり直そう。

そうやって、同じ数ヶ月を、何度も繰り返していけばいい。

それが一番安定する。

けれど、それは。

ただの「人形遊び」なのではないか。

「パストル？」

オーリが不思議そうに首をかしげる。

パストルは笑った。

この人を愛している。

それだけは本当だ。

この人を失えば、パストルはもう生きられない。

それでも、この人を解放してやらなければ。

命に代えても守りたいと、心から思った。

今もそう思っている。

ならば、すべきことは最初からわかっていた。

「指を弾いたら、お前はすべてを思い出す。だが恐怖や不安はなく、落ち着いていて、自分が進むべき道がはつきりと見えている」

「……パストル？」

「自由に生きて、オーリ。——さよなら、俺の眠り姫」

名残惜しむようにキスをして、パキン、とパストルは軽やかに指を弾いた。

END